

学校法人 日本工業大学

前理事長
故

窪田宗英先生 学園葬挙行



去る二月二十六日、前日までお元気であった学校法人日本工業大学理事長窪田宗英先生が急逝され、その学園葬が、四月十九日午後一時より、東京都青山葬儀所にてしめやかに執り行われた。享年八十一才。なお、学園葬にさきたち密葬は、三月一日自宅である墨田区東駒形の桃青寺で執り行われた。

新理事長は

大川陽康理事



発行所
日本工業大学
広報課
〒345 埼玉県南埼玉郡
宮代町学園台4-1
☎ 0480(34) 4111

新入生
特集

■ 弔 辞

窪田宗英先生。
前日までいつもの通りお仕事をなさっておられた先生が、去る二月二十六日急逝され、幽明界を異にして五十余日、私共学園教職員一同は、先生を失った深い悲しみと、大きな衝撃の中で、先生の御逝去が未だに信じられない思いであります。

また、御遺族の皆様の御傷心は如何ばかりかと、拝察申し上げます。

先生は、明治四十二年八月、現在の墨田区東駒形でお生まれになり、日本大学専門工学科機械科を御卒業。臨済宗妙心寺派平林寺の専門道場にて修行の後、昭和十一年、臨済宗妙心寺派桃青寺住職になられました。翌年五月、先生は旧制東京工業学校の教諭になられ、その後、戦前・戦中・戦後にかけての半世紀以上にわたり本学園および我が国の工業技術教育のために献身されて来られました。

先生の、生涯変わらなかつた教育理念は、工業技術教育は、常に実践的な体験学習を基盤としなければならない、熱と高く掲げられた理想を、全教職員が一丸となって継承してゆくと決意を述べた。

先生は、生涯変わらなかつた教育理念は、工業技術教育は、常に実践的な体験学習を基盤としなければならない、熱と高く掲げられた理想を、全教職員が一丸となって継承してゆくと決意を述べた。



窪田宗英前理事長死去に伴い、三月十四日理事会において新理事長として、大川陽康理事が選出された。

〔新理事長略歴〕
昭和二十二年三月
東京工業専門学校機械科卒業
昭和二十二年四月

東京工業高等学校教諭
昭和四十二年四月
日本工業大学助教授・同教務部長
昭和四十六年四月
日本工業大学教授
昭和五十年七月
学校法人東工学園理事
昭和六十二年十二月
日本工業大学学長
平成元年十月
学校法人東工学園副理事長
〔学会等における活動〕
日本塑性加工学会理事等歴任
〔賞罰〕
昭和五十九年十一月
産業教育功績者表彰

というものでした。空理空論を排し、実践に裏付けられた理論を重んじることは、先生が常に私共にお示し下さったことでした。先生は、この理念の上に立って、学生・生徒への愛情を第一義に考えた教育を、終生一貫して行われまされた。

その間、先生は東京工業学校の機械科主任・同主事を経て、昭和四十四年には東京工業高等学校並びに東工学園中学校の校長に就任し、その才腕を十分に振るわれる一方、昭和三十四年には学校法人日本工業大学の前身である学校法人東工学園評議員、昭和四十二年には法人理事として、学園経営に本格的に参画されました。

しかし、学園経営は、決して平坦ではありませんでした。太平洋戦争末期の昭和二十年、当時神田にあった東京工業学校の校舎は、空襲により灰塵に帰しました。戦後、僅かに焼け残った校舎で授業は再開されましたが、その頃、学園は新学制移行を機会に、新天地を求めて神田から現在の駒場へと移転したものでした。しかし、生徒数は極端に減少し、

第25回入学式挙行

工学部新入生は1,002名



平成三年度入学式が、四月四日、本学体育館において挙行された。新入生は、機械工学科二六二名、電気電子工学科二五二名、建築学科二五九名、システム工学科二二九名で、計一千二百名である。

工学部の新入生が一千名を超えたのは本年度が初めてで、これはシステム工学科の定員が、臨時定員増により二〇〇名から二〇〇名となったためである。大学院は修士課程で、機械工学専攻六名、電気工学専攻二名、建築学専攻五名の計三二名の新入生を迎え、博士課程(後期)には無かった。

学長式辞で大川学長は、第一に「建学の精神にある教育理念、目的をよく理解し、それに相応しい学生として、自己実現を果たして欲しい」とし、第二に「工学部に入学してきたという初心を大切に、実際に物を作り、物を開発しようとする地道な努力を大切にしたい」と述べ、「これからのエンジニアに求められる資質は、民族を越えた暖かさ創造性を持ち、日本と外国の両文化に精通する知見が必要とされると思います」と式辞を結び、大学生活を前にした新入生を励ました。

昭和二十五年には廃校寸前という状態にまで追い込まれました。そうした中であって、先生は自らの家庭生活を犠牲にし、私財をなげうって、学園再興のために心血を注がれました。実に、学園の今日あるは先生のお力によるものとし、私も過言ではありません。

その戦後の荒廃と物資の不足の中にあって、実習工場の再建を最優先させた、先生の体験学習重視という理念は、東京工業高等学校を、全国で屈指の実験実習設備を誇る現在の姿にまで育て上げ、また、その後の、ミニSL制作等の生産実習の導入は、学習意欲と創造性を高める画期的な試みとして、現在、工業教育界より高い評価を得ています。

昭和三十年代後半からの我が国は、その後の目覚ましい経済発展の最初の時期にあたり、それに伴い、優れた工業技術者不足が深刻な問題となっていました。こうした中、先生は学園を含めた将来の工業教育をお考えになり、その教育理念遂行のため工業高校に接続する大学の設立を構想し、昭和四十年、高校から大学までの一貫した工業技術教育の実現に向けて、自ら日本工業大学設置事務局長として大学設立の先頭に立たれました。当時、我が学園は、経済的にゆとりのない時代であつたにも係わらず、先生は、その限らない情熱と果敢な決断によって、昭和四十二年、機械工学科・電気工学科・建築学科を持つ日本工業大学の開学を実現させました。

先生はまた、工業教育の発展にも力を注がれ、昭和四十五年の社団法人全国工業高等専門学校協会理事を初めとして、財団法人日本私学教育研究所、工業科専門委員長、社団法人全国工業高等学校長協会副理事長、財団法人私学教育研究所評議員等の要職を歴任され、その創意に満ちた活動により我が国工業教育界に貢献されました。

その後、先生は昭和四十九年学校法人東工学園副理事長に御就任され、当時、全国的にもユニークなシステム工学科を日本工業大学に設置するなど、学園の充実にも努められました。昭和五十五年、学校法人の理事長となられた後も、次々と新機軸を打ち出され、昭和五十七年には大学院工学研究科修士課程を、昭和六十二年には博士課程(後期)の設置を見て、ここに先生の理想は一大工業教育学園として結実したのであります。さらに今春、大学院工学研究所より課程博士第一号が誕生し、先生はこの博士の誕生を大きな喜びとされておられました。

また先生は、大学における実験研究設備の増強や、研究活動の活性化にも意を注がれました。六つの研究センターを中心に最新の設備機器を導入、特に国内大学では最高電圧のインパルス電圧発生装置を備えた超高压放電研究センターは、国内外に誇れるものです。こうした先生の情熱は、工作機械を中心とした工業技術史研究センターとしての工業技術博物館の設立や、ネパールにおける古王宮の調査研究、それに伴う仏教傳説の解体修復といった国際的研究事業にも大きく開花しつつあります。

このように、終戦後の廃墟から、中学校・高等学校・大学、そして大学院に到る、一貫した工業教育を目指した一大学園を作り上げられた、先生の御功績は誠に偉大であり、

このように生前の御功績に對し、本年三月、正五位勲三等瑞宝章が贈られました。迂闊にも、私共はこのような先生から、まだまだ御指導・御教示が受けられるものとはかり思っておりました。しかし、先生は突然、一人黄泉の国へと旅立られてしまいました。

学園にとって偉大な存在であつた先生を失った今、残された私共は先生の御遺影の前に、その生涯を通じて、先生が学園に注がれた大いなる情熱と、高く掲げられた理想を継承し、これからの本学園の運営に教職員一同、一丸となつて努力して参りますことを、御誓ひ申し上げます。窪田宗英先生、その御慈愛にみちた眼差しで何時までも私共を見守ってください。

ここに学校法人日本工業大学を代表して、謹んで先生の御冥福を祈り申し上げ、私の弔辞といたします。

先生、安らかに眠みください。

平成三年四月十九日
学校法人日本工業大学
理事長・大川陽康

助手。五十九年四月、同専任講師。工学博士（関東学院大学）

☆ ☆ ☆

（次頁に続く）

窪田宗英先生のこと一つ

学校法人日本工業大学理事・
付属東京工業高等学校・中学校校長
小笠原 朋 憲



寺の住職になるつもりはなかった、やむをえず住職を嗣いだ、だからお経など学ぶ暇なぞあるわけではない、と先生が言ったわけではない。そんなことを言ったら先生がお経をあげた仏さんが冗談じゃないよと言ふだろうが、校長退任の時期も間近頃、二人だけの酒席で、俺はお経の勉強をしなかつたからこれから少しお経の勉強でもするか、と語ったのは事実である。大学も設立して十年を過ぎ、どうにか半人前くらいにはなってきたので、これからはという気持ちになれていたのかも知れない。しかし、学園はお先生に期待するところが余りにも多かった。

先生とは言うまでもなく故窪田宗英先生であり、住職の法名は玉堂和尚大禪師と云う。先生は永い間学校の職務とお寺の住職との二つを兼務されてきたことになるが、先生にとって学校は公であり、住職は私であつたであろうから学校にあって私について語ることは少なかった。そうではあつたが、たとえば一年という短い間にしる禅門での修業の結果が、先生の人間認識のうちにどのような影響を与えていたのか関心せずにはいられないのである。禅の専門道場での修業というものがどのようなのであるかは知らない。俗界でのことを含めて日常の僧としての務めも学ばなければならぬといふれば、なかなか

と記憶する。その先生が今年の一月号に寄せられた小文で、珍しく少しばかりそのことにふれている。いつどのような時に読まれたかはわからないが、アメリカの小説「鳩のジョナサン」の中で、ジョナサンが「いま、ここに」と叫ぶところを引用されて、その「如々之心 即是真実」(本来のあるがままのこの心が、とりもなおさず真実そのものである。)と同じ意味を示されたのではないかと思っている。また先生はときどき駒場の高のこの瞬間にここに居る、と言ふことが認められるだけであることが、釈迦によつて発見され云々」と書かれている。

典よりも悟りを求めるための瞑想と体系的な修業としての公案が重なりあはれるとするならば、当然のことなのかもしれない。先生から、人間の平等を徹底して考究したのは釈迦である、ということをよく聞かされたのであるが、その釈迦の思想に到るためには教典の学びを深めることは必須のことであろうから、あの時先生はお経の勉強でもするかと言われたのかもしれない。

以下は駒場の高校新聞に寄せた一文の結語である。
先生はこの世の一切は空であり、人間本来無一物であるが故に、この現実を徹底的に生きたのだと思います。先生からもっと、人間の本质にそつたこの世における人間の在り方をどうお考えか、聞いておくべきでした。何をぬかすかと先生は苦笑していることでしょう。

合 掌

私がお経に魅せられひかれ続けたのは、絶えず夢をも理想を追いつめる前向きの姿勢であり、その実現に向けてのダイナミックな行動力であつた。幸いなことに、創立五十周年の春に就職した私は、地理の教師であるということ、記念の全国ロードテストに先生の命令で参加させて頂いた。これは、窪田先生自らの指導で生徒と一緒に設計製作した機器を、当時学園が所有していた三台の車に積み込み、しかも高校生にすべて連転させて全国の道路を調査しようとするもので、当時、新聞でも話題になり、大反響を呼んだ教育界の出来事の一つであつた。生徒と寝食どころか生命を共にしての数週間の生活は、私の長い教師生活の原点となっている。この、先生の工業技術教育の理想は、SLを通じての教育や工業技術博物館の設立まで連なり、大きな美しい結晶をな

異 動

▼電気電子工学科 助教授 佐伯正盛(さきき まさもり)

昭和二十年八月二十日生。昭和四十五年三月、慶応義塾大学大学院工学研究科修士課程修了。四十五年四月、本学電気工学科助手。五十二年四月、同専任講師。六十年四月、同超高压放電研究センター専任講師。

▼建築学科 講師 加村隆志(かむら たかし)

昭和十九年八月四日生。昭和四十四年三月、法政大学工学部建築学科卒業。(株)日本材料試験所を経て、五十二年四月、本学建築学科教育技術員。

退 職

▼小泉昇三 超電圧放電研究センター教育技術員(定年)

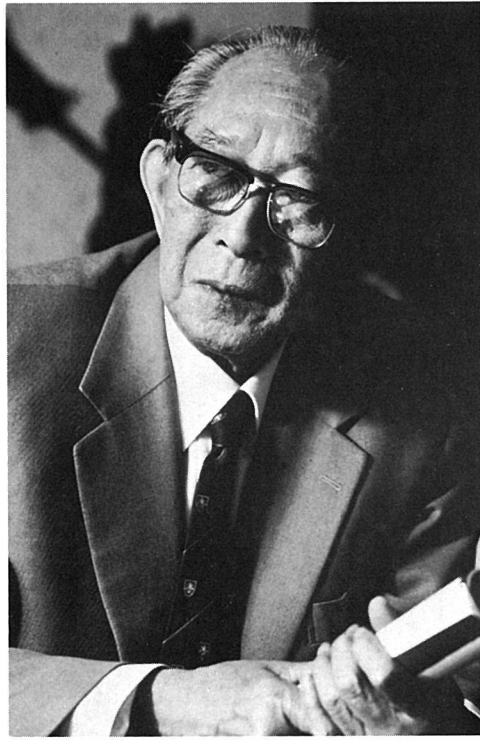
▼Eric Johnson 教養科外国人講師

が、先生の住まわれていた桃青寺は当時もつと質素な寺であつた。寒々とした寺の一室で、ストーブもなく火鉢を囲んで、ドテラ姿の先生との話し合いである。大豪邸を予想して押しかけた学生はびくびくして、拍子抜けすると同時に、学生の気持ちに立つて真心で話す先生にすっかり感激してしまつたのである。このことがもとで間もなく紛争は急速に収まつていった。語られなかつた大学史の一コマであるが、私はこのことを大学の大きな誇りとしていた。その折の学生の何人かは桃青寺での風に見舞われることになる。激しい旅立ちであつた。学費問題で学生がストライキ突入を決議し、紛争が最もこじれた頃の話である。全ての問題の根源が、学園の実力者である窪田先生にあるという結論に達したので、代表を先生に会わせるよう学生は要求してきた。当時、学生問題の責任者の一人であつた私は、他の先生と相談の上これを認めることにした。代表は先生宅に押ししかけた。ところがいまでも決して立派とはいえない

そうであつた。理事長としての多忙さと健康上からやむを得ない事ではあつたが、直接育者であつた。しかし、それ以上に、先生は不世出の思想家であり、宗教家であり、求道者であつたと私は考える。無私無欲で、しかも、晩年は肺・心臓・足の三重苦を背負いながら、道を求め続けたのである。亡くなられる日の朝、先生は日本工業大学の将来への夢を胸に一杯積み込んで、家を出られたとの事である。先生の死は、まさに求道者の旅の終りであつた。先生が求め続けた道を継ぐのは残されたものの義務である。とても、偉大な先生の万分の一の歩みもできそうにないが、先生のお教を胸に理想の大学づくりに微力を尽していきたいと考えている。

窪田先生の御冥福を、心よりお祈り申し上げる次第である。

窪田宗英先生追悼



と記憶する。その先生が今年の一月号に寄せられた小文で、珍しく少しばかりそのことにふれている。いつどのような時に読まれたかはわからないが、アメリカの小説「鳩のジョナサン」の中で、ジョナサンが「いま、ここに」と叫ぶところを引用されて、その「如々之心 即是真実」(本来のあるがままのこの心が、とりもなおさず真実そのものである。)と同じ意味を示されたのではないかと思っている。また先生はときどき駒場の高のこの瞬間にここに居る、と言ふことが認められるだけであることが、釈迦によつて発見され云々」と書かれている。

私がお経に魅せられひかれ続けたのは、絶えず夢をも理想を追いつめる前向きの姿勢であり、その実現に向けてのダイナミックな行動力であつた。幸いなことに、創立五十周年の春に就職した私は、地理の教師であるということ、記念の全国ロードテストに先生の命令で参加させて頂いた。これは、窪田先生自らの指導で生徒と一緒に設計製作した機器を、当時学園が所有していた三台の車に積み込み、しかも高校生にすべて連転させて全国の道路を調査しようとするもので、当時、新聞でも話題になり、大反響を呼んだ教育界の出来事の一つであつた。生徒と寝食どころか生命を共にしての数週間の生活は、私の長い教師生活の原点となっている。この、先生の工業技術教育の理想は、SLを通じての教育や工業技術博物館の設立まで連なり、大きな美しい結晶をな

そうであつた。理事長としての多忙さと健康上からやむを得ない事ではあつたが、直接育者であつた。しかし、それ以上に、先生は不世出の思想家であり、宗教家であり、求道者であつたと私は考える。無私無欲で、しかも、晩年は肺・心臓・足の三重苦を背負いながら、道を求め続けたのである。亡くなられる日の朝、先生は日本工業大学の将来への夢を胸に一杯積み込んで、家を出られたとの事である。先生の死は、まさに求道者の旅の終りであつた。先生が求め続けた道を継ぐのは残されたものの義務である。とても、偉大な先生の万分の一の歩みもできそうにないが、先生のお教を胸に理想の大学づくりに微力を尽していきたいと考えている。

窪田先生の御冥福を、心よりお祈り申し上げる次第である。

窪田宗英先生を偲ぶ

学校法人 日本工業大学理事・図書館長
竹 内 淳 彦



窪田理事長が急逝されたとの報告を受けた私は、ショックで目の前が真暗になった。私の社会人としての道を決定づけたのは窪田先生であり、教育者としての生き方を身をもって教えて頂いたのも先生であつた。それだけに先生の御逝去による私のショックは大きかつた。

私が窪田先生に初めてお会いしたのは、本学園が終戦後に

創立六十周年を期しての大学づくりを、先頭に立つて推進したのは窪田先生である。すでに「青塔」の創刊号でも述べたが、十分な資金もなく、大学づくりのプログラムもあつた。設立事務局の先生達が一年余も毎夜三時まで、窪田先生の情熱・信念に魅せられ、その旗のもとで頑張つたためである。先生はまさに日本工業大学の生みの親であり、育ての親でもあつた。

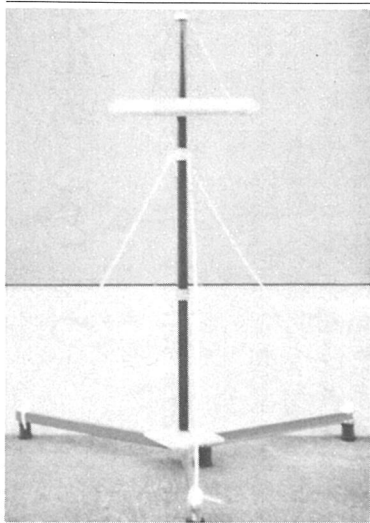
昭和四十二年大学はスタートするが、間もなく学園紛争の嵐に見舞われることになる。激しい旅立ちであつた。学費問題で学生がストライキ突入を決議し、紛争が最もこじれた頃の話である。全ての問題の根源が、学園の実力者である窪田先生にあるという結論に達したので、代表を先生に会わせるよう学生は要求してきた。当時、学生問題の責任者の一人であつた私は、他の先生と相談の上これを認めることにした。代表は先生宅に押ししかけた。ところがいまでも決して立派とはいえない

そうであつた。理事長としての多忙さと健康上からやむを得ない事ではあつたが、直接育者であつた。しかし、それ以上に、先生は不世出の思想家であり、宗教家であり、求道者であつたと私は考える。無私無欲で、しかも、晩年は肺・心臓・足の三重苦を背負いながら、道を求め続けたのである。亡くなられる日の朝、先生は日本工業大学の将来への夢を胸に一杯積み込んで、家を出られたとの事である。先生の死は、まさに求道者の旅の終りであつた。先生が求め続けた道を継ぐのは残されたものの義務である。とても、偉大な先生の万分の一の歩みもできそうにないが、先生のお教を胸に理想の大学づくりに微力を尽していきたいと考えている。

窪田先生の御冥福を、心よりお祈り申し上げる次第である。

第1回電気学会

インパルス用標準分圧器、
分流器開発共同研究委員会
開催さる



平成三年三月七日、学友会館会議室において標記委員会が開催された。

最近、インパルス電圧、電流測定に関するIEC規格（国際電気標準規格）の改訂案が発表されたが、これによると各国の公的機関が精度1%の標準分圧器、分流器を保持し、産業界の分圧器、分流器はこれと比較校正して3%の精度を維持することが義務づけら

れている。しかしながら我が国では、IECで規定しているような標準分圧器、分流器を保有していないので、早急にこれらを開発する必要に迫られている。

本委員会はこの目的のために電気学会内に設けられたもので、委員長、原田達哉（日本工大）、幹事、鎌田譲（日立製作所）、幹事補、柏木康秀（日本工大）以下、東芝、三菱、波頭、森田インパルス電圧測定用標準分圧器（定格電圧70万ボルト）

上の写真は、UHVセンター設計の雷インパルス電圧測定用標準分圧器試作モデルである。委員会終了後、UHVセンターの研究設備を見学し、玄関前で記念撮影を行い散会した。



UHVセンター玄関前で



懇親会で挨拶する大川運営委員長

去る五月十日（金）から十二日（日）の間、日本塑性加工学会と日本機械学会の共催による平成三年度（第二十二回）塑性加工春季講演会（後援：埼玉県、埼玉県産業人クラブ、日刊工業新聞社、協賛：八学会、四協会）が日本工業大学本館三階の七教室および学友

会館を会場として開催された（運営委員長：大川陽康、実行委員長：村川正夫）。全国から集まった三日間の延べ参加者は約千六百人にものぼり、大盛況のうちに幕を閉じた。この講演会では百八十一件の一般講演のほか、現在注目を浴びている塑性加工技術に的を絞った技術懇談会やシンポジウムなどの付帯事業も行われ、活発な研究発表や討論が行われた。また会期中パネル・カタログおよびVTR展示による企業の最新製品紹介なども行われた。

初日の午前中は総会、贈賞式後に東北大学名誉教授・砂川一郎氏による特別講演（演題：ダイヤモンドの魅力）があり、約二百名の参加者が興味ある話題に耳を傾けた。午後はそれぞれの専門分野に別れて一般講演が行われ、学友会館ホールでは「新しい工具材料の開発と応用」について技術懇親会が開催された。夕方には本学食堂で懇親会が催され、参加者同士のより一層の親睦が深められた。

二日目は午前九時三十分か

ら一般講演とシンポジウム、電子機器部品に要求される精密塑性加工技術」シンポジウムがそれぞれ午後五時過ぎまで行われた。昼休みには本学園の工業教育を参加者に紹介する目的でミニSL製作に関する講演と実演が東京工業高等学校の眞金氏を中心としたグループにより行われ、多くの参加者に憩いの一時が提供された。また夕方のイブニングセッションでは「日本の鋳物工業の現状と将来についてー人材の確保と育成を中心としてー」という演題で鋳物試験所の滝勇氏による講演が行われた。

最終日（三日目）も午前九時三十分から午後三時過ぎまで一般講演が行われ、せん断加工のセッションでは日本工業大学から四件の講演発表が行われた。また会期中には参加者のために工業技術博物館が開かれた。

本講演会の運営の手際の良さに対しては多くの会員の方々からおほめの言葉を戴いたが、これもひとえに本学関係者の



懇親会

海外研修 参加者募集

期 間 平成3年8月24日～9月11日（19日間）

費 用 599,000円

行き先 ロンドン→パリ→ハイデルベルグ→バーデン・バーデン→シュツットガルト→ミュンヘン→ベルリン→ジュネーブ→ニース→バルセロナ→ローマ

窓 口 学生課



第19回 日本工業大学
ヨーロッパ研修

キングモンクット大学（タイ）講師
本学修士課程へ

かねてより本学と友好関係にあったタイ王国キングモンクット大学より、電気工学科講師ユッタサック・ルンラングン氏が、研修を目的として本学修士課程電気工学専攻に入学した。

今回のルンラングン氏の着任は、昨年四月のキ

ンクモンクット大学工学部長等の来学、十月の大川陽康学長の同大学訪問のなかで話合われた交流計画の一環として実現したもので、今後の両大学間における学術交流のより一層の活発化に資するものと期待されている。

ルンラングン氏は一九五三年生まれ、三十八才。キングモンクット大学卒業。現在同大学でデジタル回路・電気工学実験等を担当している。

☆ ☆ ☆

第8回 日本工業大学 カナダ特別英語研修

期 間 平成3年8月17日～9月10日（25日間）

費 用 498,000円（25名の場合）

研 修 先 ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）の語学研修所（カナダ・バンクーバー市）

プログラム 月～金曜日 午前中3時間教室で授業、午後は週1回フィールドトリップがある。

カリキュラム ①聞いて理解する力 ②単語と熟語 ③英会話 ④バンクーバー市内での会話の実践的な活用

宿 舎 ホームステイ（バンクーバー市在住のカナダ人の家庭に滞在し、その家族の一員として生活する。）

そ の 他 UBCでの語学研修修了後、アメリカのサンフランシスコへ渡り、研修成果を实践する。カナディアン・ロッキー等へのオプション・ツアーも用意されている。

窓 口 教務課

システム工学科 齋田教授
— S & T のフェローに —

齋田教授のフェローシップは、ソニイパクトプリンティングの分野、特に電子写真の分野における基礎的研究が高く評価されたものである。

☆ ☆ ☆

The Society for Imaging Science and Technology

FELLOWSHIP
Awarded to
Noboru Kutsuwada

For Significant Contributions to the Progress of Imaging Science and Engineering

May 14, 1991

システム工学科 齋田教授に
田井教授に、米国のネソタで五月十一日、十七日まで開催されたThe Society for Imaging Science and Technologyの第四十四回年会において、特に名誉なこととされるフェローシップ（特別会員）が与えられた。